

〈論 説〉

豊子愷『教師日記』研究 (一)

大野 公賀

はじめに

「子愷漫画」と称される独自のイラストと散文で著名な豊子愷(ほうしがい、一八九八―一九七五)は、近代中国における代表的文化人の一人である。豊子愷は高僧、弘一法師(一八八〇―一九四二、一九一八年に出家する以前の俗名は李叔同)の芸術および仏教の高弟としても知られており、仏教的哲理を日常的題材で表現した豊の漫画や散文は、都市部の新興知識階級を中心に絶大な人気を博した。豊子愷はまた、『源氏物語』や夏目漱石『草枕』など、日本文学の翻訳でも著名である。

抗戦期、豊子愷は約一〇年にわたり、親族一〇数名と共に中国各地で疎開生活をおくった。その間、一九三八年秋から翌年初夏にかけて、豊子愷は広西省立桂林師範学校および同地に疎開していた浙江大学で芸術と国語の教師となった。小論で扱う『教師日記』は、その時期に記されたものである。桂林師範学校当時(一九三八年一〇月―

一九三九年三月）の日記は、雑誌『宇宙風（乙刊）』（第一七期—第三〇期、一九三九年一月—一九四〇年一〇月）に掲載された。後に、単行本として出版された『教師日記』（一九四四年、重慶・萬光書局、初版<sup>①</sup>）には、浙江大学当時（一九三九年三月—一九三九年六月）の日記も収録されている。日本には一九四六年に小野忍の書評で紹介された。<sup>②③</sup>

出身地である江南地方や大都市上海での生活経験しか持たない豊子愷にとって、中国各地での疎開生活は中国を再発見し、その将来について再考するための絶好の機会であった。豊子愷は『教師日記』で、しばしば江南地方と広西省の風景や生活習慣、言語の違いに触れ、中国の民族的・文化的多様性について論じた。豊子愷はまた『教師日記』において、中国が国家として不調和、不均衡な状況にある点を指摘し、それこそが中国の内政・外政問題の根本的要因であると記している。戦時下、知識人の多くが極度に左傾化する中、豊子愷は自国の現状と将来について冷徹な目で分析し、国民にメッセージを發しつづけたのである。

豊子愷がこのような冷静かつ客観的姿勢を保ちえた背景には、その東洋的ヒューマニズムが存在する。豊は弘一法師による帰依式を受けた仏教徒であるが、幼時期に学んだ儒教とともに、それらの根底に存在する哲理を追求した。豊子愷はそれらを東洋的ヒューマニズムという形へ昇華させ、『教師日記』などの作品で読者に提示して見せたのである。その独自の思想は中華人民共和国建国後も保持され、豊子愷は文革期にも秘密裏に共産党批判の散文や漫画を創作しつづけた。

小論では『教師日記』を通じて、当時の文壇事情なども踏まえながら、中華民国期に一世を風靡した文化人、豊子愷とその東洋的ヒューマニズムについて紹介、考察する。

## 一. 『教師日記』執筆、公開の目的

初めに、豊子愷が『教師日記』を執筆、公開した目的を序文から見ておきたい。序文によると、豊子愷はもともと日記をつける習慣を持ってはいなかった。それは「平素は生活が凡庸で、浮世離れしており、書くべきことも無く、また筆を執るのが億劫だったから」である。しかし、一九三七年の冬に日本軍が突如、豊の故郷石門湾を攻めてきたため、豊は親族とともに疎開の途に着いた。各地を転々とした後、一九三八年の夏にやっと桂林の両江に落ち着くに至ったが、この半年の間、「生活はまことに平凡ならざるもの」で、豊子愷はその詳細を「辞縁縁堂（縁縁堂を辞す）」、「桐廬負暄（桐廬での日向ぼっこ）」、「萍郷聞耗（萍郷にて凶報を聞く）」、「漢口慶捷（漢口での勝利）」、「桂林講学（桂林での講義）」の五篇に記した。物事を記録する習慣が身に着いたのは、これ以降のことである。<sup>4</sup>

両江に落ち着いてからは、教師という定職にも就き、「生活はまた平凡なものになった」。しかし、豊子愷は日記を書き続けることにした。その理由について、豊は次のように記している。

しかし、野蛮なる民は我が国を動乱して、とどまることを知らず、我が国の喪失と世の乱れは日ごとに甚だしい。我が身は自然あふれるこの地に落ち着き、仕事にも生活にも満足しているが、我が心はどうして、平時に故郷で暮らしていた時のように悠然としておられようか。およそ過ぎて戻らざるは時であり、起こりて止まざるは思いである。ましてや、これまで非常な危険を経て、命ばかりはかろうじて助かり、民衆の大きいなる苦しみを見てきたのだ。今後、どうしてのんびりと日々を過ごし、自然に心を解き放つことができようか。そこで、この日記を書くことで、前述の五篇の続きとする。革張りの立派な日記帳は無いが、毎日欠かさず日記をつけて、途中で止めることの無いようにしたい。それは事実や気持ちを書き記すためではなく、恒心に励み、

勤労を学ぶためである。かつて、陶侃は一日に百枚の瓦を運んだ。私は一日に数百字を記す。不足の観はあるが、無情の瓦より少しはましであろう。これを序文とする。<sup>(5)</sup>

ここで豊子愷が引用した陶侃（二五九—三三四、字は士行、鄱陽（江西省）の人）とは東晋の將軍で、田園詩人として著名な陶淵明の曾祖父とされている。陶侃は初め荊州都督の配下として各地の叛將や強賊を討伐し、その活躍が王敦の目に留まり、王の推挙で三一三年に荊州の刺史に昇進した。ところが、杜弼らの荊州での叛乱を平定し、功を上げた陶侃は王敦に妬まれ、三一五年には広州刺史に左遷された。

この頃、陶侃は毎朝百枚の瓦を部屋から運び出し、每晚それを部屋に戻すことを自らに課していた。ある人がその訳を聞いたところ、陶侃は「中原に力をふるう時がくる、その日のために辛苦に馴れようとしているのだ」と答えたという。その後、陶侃は再び荊州刺史となり、蘇峻の乱の平定に功があつた。東晋最大の州鎮の統帥として大きな勢力をもち、長沙郡公となり、在任のまま没した。<sup>(6)</sup>

豊子愷は前述の序文で、自らを陶侃に例え、日記を書くことで勝利の日を目指して苦難に耐える姿勢を宣言してみせた。陶侃にとつて、自らを窮地に陥れた王敦は、かつて自らに昇進の機会を与えてくれた恩人でもある。若き日に日本に留学し、竹久夢二の作品に影響を受け、自らも夢二と同じく筆と墨で西洋的画風と東洋的画趣を併せ持つ作品を描くことで、独自の世界を開いてきた豊子愷が、日本との戦いを陶侃の運璧の故事に例えた背景には、単なる復讐譚にとどまらぬ、日本への複雑な思いがこめられているのではないだろうか。

## 二．『子愷』生活と前途への希望

豊子愷は前述の序文を書いた翌日、日記の冒頭に次のように記している。

今日から日記を始めるにあたり、喜ばしい出来事が二つあった。今日から新たな学校で授業が始まり、私は教師になった。また今日、新たな子どもが生まれ、私は父となった。今日は何という素晴らしい日であろうか。

一朝にして二つの新たな立場を得たのである。まして、私はこの一〇年の間、教師をしておらず、妻はこの一〇年間、育児をしていない。我々はそれぞれ一〇年ぶりに再び、懐かしい仕事に就いたのだ。しかも、同じ日に始めるとは、まるでお互いに約束をしていたかのようで、何ともまれなことではないか。歓喜の疲労に包まれつつ、日記の第一頁を記す。<sup>(7)</sup>

豊子愷は一九一九年に浙江省立第一師範学校を卒業した後は、同校の先輩であり、同じく李叔同の高弟であった呉夢非（一八九三—一九七九）、劉質平（一八九六—一九七八）と共に設立した上海師範專科學校（男女共学・二年制）を皮切りに、日本に留学した一年弱の期間を除いては一貫して教職に就き、上海郊外呉淞の中国公学や浙江省上虞県の春暉中等等で美術や音楽等の芸術科目を教えていた。一九二五年には、国家権力の介入や特定のグループ、個人からの経済的援助を拒否した、自由で新しい教育を目指して、春暉中学の同僚であった匡互生（一八九一—一九三三）、朱光潜（一八九七—一九八六）と共同で立達学園を設立した。しかし、経営難から一九二八年に同校の西洋画科が停止されてからは教学に携わることは無く、漫画と随筆の創作に専念していた。<sup>(8)</sup>一九三八年に豊子愷はまさに一〇年ぶりに教師となったのである。

『教師日記』執筆当時、豊子愷が勤めていた広西省立桂林師範学校（現桂林師範高等専科學校）は、広西省の鄉村教育に力を入れていた唐現之（一八九七—一九七五）が一九三八年八月に臨桂県两江鎮に創設した学校で、豊が赴任した一〇月二四日にはまだ校舎も完成しておらず、建設作業の進む中、新学期が始まった。学生数は百三〇余名、教師は一〇余名で、学生はほとんどが広西出身であったのに対し、教師の多くは全国各地から桂林に疎開して

来た知識人であった。<sup>(9)</sup>

開校式の当日、豊子愷は高等師範学校と簡易師範学校で美術と図画の授業を担当した後、家に戻る途上、桂林市内の病院に入院中の妻、徐力民（一八九六一一九八三）の容態が思わしくないとのお知らせを受けた。交通事情の悪  
い中、どうにか市内に到着すると、妻の子癩症はかなりひどく、すぐにも手術を要する状態であった。数時間に及ぶ手術の後、豊子愷にとって七番目の子どもとなる男児新枝が生まれた。<sup>(10)</sup>

今回の出産は、徐力民にとっては九年ぶりの事であり、劣悪な状態での相次ぐ移動に加え、四〇代という年齢もあつて、かなりの難産となり、意識不明のまま帝王切開での分娩となった。症状は極めて重篤で、昏睡状態が一昼夜続いた。その折の様子を豊子愷は日記に次のように記している。

明け方、力民が突然目を覚まし、空腹を訴えた。本人の話では、入院後すぐに記憶を失い、この時初めて意識が戻ったとのこと。全身の疲労感はあるものの、意外にも痛みは無い由。今回は言わば安産ではなかったが、通常のお産に比べて痛みが少なく、正に「禍を転じて福となす」結果となった。妻は自分ももう出産を終えたとは信じず、また生まれたのが男児であるとは更に信じなかった。陳宝（豊子愷の長女、大野注）が看護士に特別に頼んで赤ん坊を抱いて来てもらって妻に見せ、それでようやく半信半疑となった。私もこの時、初めて赤ん坊が男児だと知った。昨朝、馬一浮先生をお見送りする時、馬先生は子ども誕生を祝う言葉をかけて下さり、生まれたのは男か女かとお尋ねになった。私は答えられず、ただ「『人』です」とだけ申し上げた。一同みな失笑した。<sup>(11)</sup>

さて、豊子愷の随筆を日本で最初に翻訳、出版したのは吉川幸次郎である。吉川は翻訳集『縁縁堂随筆』の「訳者の言葉」で、豊について次のように記している。

著者のお子さんに対する愛は異常のようであり、また一般児童の生活にも、常に興味と同情を寄せている。(中略) 私がかつて周作人<sup>ツェツニン</sup>先生にお目にかかった時、先生は「支那には子煩悩にあたる言葉がありません」といわれた。著者の如きは、子煩悩といってもいいようである。しかしよく見ると、著者のお子さんに対する愛には、支那人に特有な無常観、ものを流転の形においてしか見ることの出来ぬ悲しみが、その底を流れている。これはわれわれの「子煩悩」とはちがう。やはり支那には「子煩悩」という言葉はなかったのである。<sup>(12)</sup>

吉川幸次郎は前文で、中国には「子煩悩」という言葉はないと述べたが、『教師日記』には豊の自称『子煩悩生活』が描かれている。

近頃は毎朝、赤ん坊の面倒を見ている。牛乳を飲ませ(徐力民が母乳の出ない体質であったため、大野注)、襁褓を取替え、歌を歌うのが今や習慣となった。一五年前の「子煩悩」生活をまたおさらいしているようなものだ。しかし、腕は少しも鈍っていない。いや、鈍っていないのではない。一種の親子愛のおかげで、少しやったら、すぐに勘が戻ってきたのだ。<sup>(13)</sup>

新枚の誕生から約一ヶ月後、豊子愷は四一歳の誕生日を迎えた。おりしも、豊一家が故郷を後にして、ちょうど一年が過ぎようとしていた。豊はこれまでの人生をふりかえり、様々な感慨にふけりつつ、疎開の途についてからこの一年間はまさに、陸遊(一一二五―一二〇九、字は務観、号は放翁、山陰(浙江省紹興)の人)の詩「遊山西村」の対句「山重水複疑無路 柳暗花明又一村」に例えるに相応しいと感じていた。<sup>(14)</sup>

陸遊は南宋を代表する詩人の一人であるが、政治的には榮転と免官をくりかえす人生であった。陸遊の生まれた一一二五年に北方の女真族、金が侵入したことで(靖康の変)、宋は国土の半分を失ったが、その後も戦乱は続き、南宋と金の講和が成立したのは一一四二年のことである。この間、南宋では金との講和による現状維持を主張する

講和派と、徹底的抗戦を主張する抗戦派との対立が続いた。陸遊は強硬な抗戦論者で、一一四二年に宋と金との平和が復活した後も抗戦論を唱え続けた。全体を通じて、講和派が実権を握っていた期間が長かったため、陸遊も冷遇されていた期間の方が長い。

「遊山西村」は、陸遊が隆興（現江西省南昌市）の通判（副知事）の職を免じられ、郷里に戻った翌年（一一六七）年、陸遊が四三歳の時に詠んだものである。当時、陸遊は郷里山陰郊外の三山というあたりに住んでいたが、この詩の「山西の村」とは三山の西にあった村を指すと考えられる。

「遊山西村（山西の村に遊ぶ）」 陸遊

莫笑農家臘酒渾 笑う莫かれ 農家の臘酒 渾れるを

豊年留客足鷄豚 豊年 客を留むるに 鷄豚 足れり

山重水複疑無路 山重なり 水複なつて 路無きかと疑うに

柳暗花明又一村 柳暗く 花明るきに 又た一村あり

簫鼓追隨春社近 簫鼓 追隨して 春社近く

衣冠簡朴古風存 衣冠 簡朴にして 古風存す

従今若許閑乗月 今従り 若し閑に 月に乗ずるを許さば

拄杖無時夜叩門 杖に拄りて 時無く 夜 門を叩かん

田舎家の暮れに仕込んだ酒が濁り酒だなどと、あざけるには及ばない

豊作で、お客をもてなすには、鶏も豚も十分すぎる程

重なり合う山々、折れ曲がった川筋、もう行き止まりかと思つたが

くろくろと茂る柳のかけ、まばゆいばかりの花々、また村が一つ

笛や太鼓の音が後を追つて来るのは、春の祭りが近いからだろう

村人の着物や、かぶりものの素朴さには古代の風俗が残っている

これからも月の光に誘われて、私は遊びに来るかもしれない

杖について、不意に訪れても、どうか大目に見てほしい<sup>15)</sup>

これは、陸遊の詩の中でも著名なものであるが、豊子愷が引用した対句「山重水複疑無路 柳暗花明又一村」は特によく知られ、広く人口に膾炙している。この対句について、小川環樹は次のように論じている。

二句は風景の描写においてすぐれているのだが、私はこれを読んで感ずることが、もう一つある。その中に人生の行路についての譬喩<sup>ゆ</sup>がふくまれていると解せられることである。水路をゆくほどに、平野から山あいにはいり、兩岸はせまり、前途の見とおし<sup>し</sup>がきかなくなつて、もう路の終りになつたのかと心配しているとへ、ひとつの山の曲りかどを折れたと思つたと、にわか<sup>に</sup>に目の前はひらけ、まばゆく花がさきみだれている。それはほとんど絶望と思われた前途に、意外に明るい光がさしたのに似ている。陸遊は悲観主義の人ではなかつた。(中略) 彼は楽天的な人生観をもつていて、終生それを失わなかつた。<sup>16)</sup>

小川はまた、陸遊の「遊山西村」と、その三四年後、陸遊が七七歳の時に同じく郷里で詠んだ七言律詩「西村」の二首を取り上げ、そこから「われわれは陸遊がたいへん落ちついた平静な心の持ちぬしであることを知る。その

静かさを妨げる雑音はない。『柳暗し』とは言うものの、風景は明るく、前途への希望を決してなくさない闊達さがある」と述べている。<sup>(17)</sup>

前述のように、「遊山西村」は陸遊が失脚し、郷里に戻った折に詠んだものである。そこに詠まれた「山重水複疑無路 柳暗花明又一村」の二句に、小川環樹は陸遊の「前途への希望」と、それを「決してなくさない闊達さ」を読み取ったわけであるが、それはまさにこの句を引用した豊子愷にも通じるものである。

しかし、豊子愷も疎開当初からそのような闊達さを身につけていた訳ではない。豊子愷が一九三八年一二月に、上海に残っていた恩師、夏丐尊（一八八六一一九四六）に宛てた私信には次のように記されている。

流浪の当初は苦しい思いをいたしました。連日、苦しみを訴えましたが、苦しみは去らず、むしろ憂いのあまりに我が身を傷つけ、生きる力を失ってしまったのです。そこで考えを改め、逆境を耐え忍び、人事を尽くして天命を待つことにいたしました。先のことは考えないようにし、この一年は苦しさの中にも尚、分に応じてそれなりに楽しみを見いだすこともできました。そのおかげで、身体も元気を取り戻してまいりました。<sup>(18)</sup>

このような心境の変化について、豊子愷は陸遊の詩を引用した、誕生日の日記でこうも述べている。

この一年のうちに、苦難や心配、いらだち、緊張、危険などはもう既に充分に経験した。しかし、その一方、思いがけない幸運や危険からの避難、新しい経験、楽しみも少なからず味わえた。（中略）これまでの生活は、あたかも大平原のようで、長い道が果てしなく続き、変化に乏しく、せいぜい、いくつかの曲がり角を曲がり、いくつかの溝を飛び越え、あるいはいくつかの橋を渡ったに過ぎない。この一年間は険しい山道のようなものであったが、そこで私は少なからぬ経験を重ね、少なからぬ鍛錬を受けた。しかしながら、私は決して、険しい山道を賛美し、平らで広々とした道を楽しまない訳ではない。広々とした大きな道をゆつくり

歩むことを望まない者がいようか。しかし、険しい山道にも、その苦勞に報いるだけの報酬があり、決して完全不幸だという訳ではない。さらには、そうした険しさに恐れをなして、何もせず、連日のように苦しさを訴えるにはあたらぬ。四一歳の誕生日に一人で人生を振り返る際、こう考えることで私は大いに慰められ、また励まされる思いがする。少なくとも、子どもたちが将来、私のこのような考えを受け継いでくれればと思う。<sup>(19)</sup>

この日記が書かれたのは、豊子愷一家が戦禍を逃れて各地を転々とし、ちょうど一年になるうかという時である。国家の行方にも、自分自身や家族の将来にも何の見通しも立ってはいないが、それでもひとまず桂林に落ち着くこともできた。陸遊の詩はいわば、豊子愷が自分自身に向けて、そしてまた陸遊の詩と豊子愷の随筆を愛する読者に向けて送ったメッセージであり、どのように絶望的な状況であつても前途は必ずや開かれており、前途への希望を決して失わぬようにとの願ひであつた。

また、戦乱の中、母親の年齢や劣悪な環境での長時間の移動といった諸問題を乗り越えて、一〇年ぶりに無事に生まれた幼子は、まきに行き止まりの先に突然ひらけた美しい景色の様で、豊と家族に尽きせぬ喜びと希望をもたらしただことであろう。豊子愷と家族のこうした思いは、「新枚」という名前にも表現されている。一九三八年春、豊は山東省台兒莊での中国軍の勝利を祝して「大樹被斬伐、生機並不絶。春来怒抽条、气象何蓬勃！(大樹は根元から伐られても、その生命力は決して絶えることがない。春が来れば勢いよく枝を伸ばす、その様はなんと潑刺としたことか！)」という詩を詠んだ。豊子愷は当初、この詩にちなんで、生まれてくる子どもに「新条(新しい枝)」と命名するつもりであった。しかし、「条」の字は響きが悪いので、同義の「条枚」の「枚」の字がよいという、長女陳宝の説にしたがい、子どもは「新枚」と名付けられた。<sup>(20)</sup>

新校が生まれると、豊子愷はそれまで自らが書齋としていた牛小屋を直し、そこに新校を住まわせることにした。それについて、豊は『教師日記』に次のように記している。

牛乳を飲み、牛小屋に住めば、新校は将来、牛のような大きな力で、敵陣を追い散らし、失地を回復できるだろう。少なくとも田畑を耕して、世の中の餓えた人々を救うことができる。たとえ、その鈍重さも牛のようであつても、一向に構わない。中国が現在のような状況に置かれているのは、実に人々があまりに賢すぎて、愚直な努力をしようとしなかったからなのだ！<sup>(2)</sup>

### 三．戦時下での「万物一体」論

前述のように、豊子愷にとって教壇に立つのは約一〇年ぶりのことであつた。それに際して、豊が最も懸念したのは言葉の問題と、初めて国語の授業を受け持つことの二点である。

学生ほとんどが広西出身で、浙江なまりの強い豊子愷の言葉を理解できる者はわずか半数程度であつたため、豊はまず学生に朗読を聞かせて自分の話す中国語に慣れてもらうことにした。同校では教育庁の規定に従い、中華書局版の師範学校用『国文読本』を教科書としていたが、そこに豊の随筆「私の苦学経験」が掲載されていたため、最初の授業ではそれを朗読した。

朗読に際して、豊子愷は学生に、なぜ浙江なまりの強い自分の中国語に慣れてもらいたいか、その理由を二つ黒板に記した。まず一つ目の理由として、豊は本来ならば自分も桂林の言葉を覚えるべきであろうが、桂林以外の学生もおり、また自分のように年齢が高くなると舌が硬くなり、それまで出したことのない音を出すのは難しいので、学生が自分のなまりに慣れてくれる方が合理的だからだと冗談めかした後、二つ目の理由を次のように記し

た。

ましてや、これは君たちに大いなる利点をもたらすのだ。このたび、君たちに授業をしてくれる先生方は中国各省からいらした方たちだ。君たちは中国各省の方言を耳にすることになる。言葉は文化と大いに関係している。君たちが中国各省の言葉を聞いて、それに慣れれば、君たちの度量や気概も大きくなる。それは広西省一省に限ることなく、中国全土へと広がっていくことだろう。<sup>(22)</sup>

豊子愷は学生に、自分の周辺の小さな世界だけに生きるのではなく、同じ中国人の国家である中国全土に想いを馳せることの重要性を伝えた訳であるが、これは豊子愷自身が中国各地で疎開生活をおくり、各地の生活習慣や言語の違いに触れ、中国の民族的・文化的多様性を再発見したことに拠るのである。こうした経験が、豊子愷に中国が国家として不調和、不均衡な状況にあることを改めて認識させたのである。

上述の引用で、豊は学生に共感の対象を広西省から中国全土へと広げるように提唱したが、その数日後に開かれた三クラス合同の学生大会ではさらに次のように述べた。

今日、君たち三クラスの学生会が合同で成立大会を開くにあたり、この地方でよく耳にする言葉を送りたい。その言葉とは「三位一体」である。君たちは三クラスに分かれているが、これは事務手続きの便宜上、分かれているのである。実際には、この三クラスの学生はやはり一体であり、君たちは皆、桂林師範学校の第一期生である。

三位一体であるからには、君たちは「我々」、「君たち」、「彼ら」の意見を排除して、協力してやっていかねばならない。くれぐれも、小さなグループの枠に固執して、お互いに問題を惹き起こしたりしてはいけない。

およそ団体の活動が（特に中国において、原注）失敗するのはすべて皆、これが原因なのである。<sup>(23)</sup> 君たちは人数

こそ少ないが、それでも一個の団体である。君たちは皆、全体に重きを置くという考えをもたねばならない。それには、度量を大きくするだけでよい。このような度量というものは自分で身につけることができる。たとえば、君たちと桂林の各学校の学生は皆、同じく広西の学生である。君たちと全国各校の学生は皆、同じく中国の学生である。一步おしすすめると、君たちと全国のすべての人は皆、同じく中国人である。さらに一步おしすすめると、君たちと世界のすべての国民は皆、同じく人である。さらに一步おしすすめると、君たちとこの世のすべての動植物は皆、同じく生きものである。したがって、外国人が非人道的な扱いを受けていたならば、我々は彼らに代わって憤慨せねばならない。動物が虐待されていたならば、我々はまた同情心をもたねばならない。度量を大きくすれば、我執はおのずから弱まり、争いはおのずから消滅する。我執も争いもない状態は、団体生活にとって、実に最大の幸福である。団体とは人間の身体のようにあるべきで、身体の各部位は決して互いに争ったりはしない。そこで、私は君たちに世界を一つの身体と見なすことを勧める。一步さがつて、中国を一つの身体と見てみよう。数百歩さがつて、少なくとも桂林師範学校を一つの身体と見てみよう。つまり、我々は「万物一体」の大きな度量をもつべきなのである。<sup>24</sup>

この講話は上述のように、桂林師範学校の学生に向けて語られたものであるが、豊子愷はその後、同文を『宇宙風（乙刊）』第一八期に掲載し、また一九四四年出版の単行本『教師日記』にも収録している。戦時下に発表するには勇氣のいる内容であるが、豊は敢えて発表した。仏教を信奉し、幼少時から儒教的素養を身につけていた豊子愷にとって、慈悲や仁愛などの概念は抗戦期においても決して捨て去ることのできないものであり、国家全体が戦闘態勢にあるからこそ、敢えて提唱すべきものであった。

この「万物一体」という考えについて、豊子愷は桂林師範学校の後に勤めた桂林浙江大学での芸術の授業を終え

るにあたり、「万物一体」とはすなわち広範な共感の心であり、それこそが「芸術心」の本質であると述べている。<sup>(25)</sup> 豊はまた、芸術とは「この世の平和と幸福の母」であるとも述べている。<sup>(26)</sup> それは、芸術教育を通じて「芸術心」、すなわち万物を一体と見なす「広範な共感の心」を養い育てることが、平和で幸福な社会の実現につながる<sup>(27)</sup>と考えていたからである。

#### 四・教師生活

桂林師範学校の学生のほとんどが広西出身者であったため、浙江出身の豊子愷は授業に際して、学生に自分の言っていることが理解してもらえるか、不安を抱えていた。前述のように、自分のなまりに慣れてもらうため、豊は最初の国語の授業では、自らの随筆「私の苦学経験」を朗読し、二回目<sup>(28)</sup>の授業では、厨川白村（二八八〇—一九二三）の作品を取り上げた。それは、入試の国語答案の多くが「人はこの世に生をなして……」という、古めかしい決まり文句で始まっていたためである。ところが、この試みは敢えなく失敗に終わった。この時の様子を豊は『教師日記』に次のように記している。

魯迅先生の翻訳はあまりにも厳密すぎて、学生が理解できないのも仕方がないような所がいくつかあった。中国語らしい文に改め、黒板に書いてみせたが、それでもわからない学生がいた。理解できた学生も、あまり興味がないようだった。<sup>(28)</sup>

豊子愷が授業で取り上げた作品は、内容やタイトルから見ても、おそらく魯迅訳『出了象牙之塔』[「二 Essay」]（原題『象牙の塔を出て』[「二 エッセイ」]）と考えられる。尚、豊子愷が魯迅の訳文について、上述のように感じたのもやむを得ない。それは、魯迅（二八八一—一九三六）が意図的に、敢えてそう訳したからである。魯迅は「苦悶

的象徴』引言」および「『出了象牙之塔』後記」の二篇で、自分の翻訳が「直訳」なのは「原文の口調をそのまま保ちたいから」だと述べ、また文法的に問題のあることも認めている。<sup>(29)</sup>

魯迅は厨川の著述のうち『象牙の塔を出て』と『苦悶の象徴』の二冊を翻訳出版しているが、実は魯迅の数ヵ月後に豊子愷も『苦悶の象徴』を翻訳している。<sup>(30)</sup> この件について、魯迅は豊の訳本の出版以前から既に耳にしていたようである。<sup>(31)</sup> 豊の訳本は商務印書館から文学研究会叢書として出版されており、魯迅が同研究会の鄭振鐸（二八九八—一九五八）や葉聖陶（二八九四—一九八八）等から情報を得た可能性は高い。魯迅と豊子愷には、他にも共通の友人が多いため、あるいはそのうちの一人から知らされたのかもしれない。例えば、同じく厨川著『近代の恋愛観』を翻訳した夏丐尊は、豊の浙江省立第一師範学校の恩師であるが、魯迅にとっては一九〇九年に同校の前身、杭州兩級師範学堂に赴任して以来の友人である。また、魯迅作品の表紙デザインを担当し、魯迅と平素から親しく交際していた陶元慶（一八九三—一九二九）は、豊の上海師範專科學校時代の教え子であり、当時は立達学園の同僚でもあった。

豊子愷は魯迅の翻訳に違和感を覚えながらも、なぜわざわざ厨川の「エッセイ」を選んだのだろうか。その意図について、厨川の文章から考えてみたい。厨川は「エッセイ」とは、「冬ならば暖爐のそばの安樂椅子にでも凭れて、夏ならば浴衣がけに苦茗を啜りながら打寛いで、親しい友と心おきなう語り交はす言葉を其儘筆に寫したやうな」ものであり、「エッセイに取つて何よりも大切な要件は、筆者が自分の個人的人格的色彩を濃厚に出す事である」と考えていた。こうした考えの背景には、表現に関する厨川の以下のような認識が存在すると考えられる。

なせもつと寛ろいで飾り氣なく物が言へないのだらう。氣取つて固くなつたり、論理の輕業をやつたり、有りもしない學問を振り廻はして利巧ぶつたりなぞしないで、もつと素直に、もつと無邪氣に率直に、そしてまた

自然の儘に物を言つたつて、何も値打さかが下るわけではあるまい。<sup>(32)</sup>

豊子愷は日常生活に題材をとった小品文や漫画を得意としていたが、厨川のこれらの言葉は、まさに自らの言わんとした事であつただろう。豊子愷は、学生が陳腐な文言でもっともらしい文章を書くのではなく、たとえ稚拙ではあつても、自らの言葉で自らの考えを表現することを望んだのである。事は国語だけの問題ではない。

では、もう一つの科目、美術はどうだつたのだろうか。豊子愷は一九二〇年代後半になって、随筆や漫画の創作活動に専念する以前は芸術科目の教師として生計をたてており、美術を教えるのは問題がない筈であつた。

ある日の授業で豊子愷は遠近法について講義した。豊の考えでは、絵画における遠近法とは文章における文法のようなもので、論理の概念が明晰であれば文法を学ばずとも作文ができるように、透視の概念が明晰であれば遠近法を学ばずとも絵を描くことができる筈であつた。そのため、豊は、遠近法について詳細に説明せずとも透視の理論を明確に論じれば良いと考えていたが、大多数の学生は豊が何の話をしているのか、まったくわからないようであつた。

理解できない様子の学生を見て、豊は次のような感慨を覚えた。

これはおそらく私の贅沢な望みだつたのだろう。一〇年間、教師をしていなかったので、学生にうまく対応できない。学生を友人あるいは家の子どものように思っていたのだが、短い時間で一種の技法を教えるのは、明らかに為し難きことであつた。<sup>(33)</sup>

美術を教えるにあたり、豊子愷が戸惑いを覚えたのは、技術面の指導だけではない。抗戦下、芸術の授業で果たして何を、そして如何に教えるべきなのか、豊にとつて自らの信念に対峙せざるを得ない日々が続いた。一九三八年一月二六日の日記に、豊は次のように記している。

芸術科を教えるにあたり、私は直接的な効果を求めるのではなく、間接的效果を重視するように提唱する。学生には、直接役に立つような絵が描けるようになるよりも、美を愛する心を育てて欲しいのだ。絵を描くような心持ちで日々をおくり、社会に向き合うことができれば、生活は美しく、この世は平和になる。これは芸術の最大の効果である。芸術科目を学ぶのにも「挙斯心加之彼（斯の心を挙げて之を彼に加うる、大野注）」は必要であり、また「善推其所爲（善く其の爲す所を推す、大野注）」も必要である。したがって、現在は非常時ではあるが、芸術科も必ずしも抗戦画だけを重視する必要はない。現在、芸術科の教師をしている者で、この意味がわかる者は一体どれほどいるだろうか？<sup>(34)</sup>

文中の「挙斯心加之彼」、「善推其所爲」は『孟子』（梁惠王章句上）からの引用であるが、いずれも自分の身近な者や身内に対するような優しさや思いやりを広く一般に推し広げ、天下万民にまで及ぼすことを指す。<sup>(35)</sup>

この日記を書いた当日、豊子愷は国語の授業で『孟子』を読ませたが、この箇所に来た時、豊は大いに感動を覚えた。豊子愷にとって、当時の社会が乱れているのはすべて、人が「推其所爲」できず、また「挙斯心加之彼」できないから、つまりあまりにも自己本位で、他者への共感や同情が不足しているからであった。豊子愷は続けて、「人を治めるのに、内から治めるのではなく、外から統制せんとするがために、問題が次から次へと生じ、ついには收拾がつかなくなるのだ」と述べている。<sup>(36)</sup>

豊子愷はこの理を感動とともに、学生に詳細に説明したが、彼らはただ黙々と聞くだけで、感動しているのか、どうかもわからない。しかし、豊にとって、これは時勢とは流れを異にする、自らの美術の授業に対する信念を支える証左にもなった。<sup>(37)</sup>そして、それは美術や国語の授業だけに關する問題ではなく、戦時下での豊子愷の姿勢そのものにも關わることであった。

## 五. リベラリストとして

前述のように、豊子愷を最初に日本で紹介したのは吉川幸次郎である。吉川は一九三〇年代に上海で出版された豊の随筆集四冊から一二篇を選び、翻訳集『縁縁堂随筆』として一九四〇年に創元社から出版した。吉川は同書「訳者の言葉」で次のように述べている。

著者豊子愷<sup>フオンツァイ</sup>氏を、私は現代支那における最も芸術家らしい芸術家だと思ふ。(中略) 私は著者のいかにも芸術家らしい真率さを、万物に対する豊かな愛を、更にまたその気品を、気骨を、愛するからである。現代において陶淵明<sup>トウユンミン</sup>的な、また王維<sup>ウァイツイ</sup>的な人格を捜すならば、まず著者である。がさつなまやかしもの多い海派<sup>ハイパイ</sup>—上海派の文人の中で、著者の姿は、鶏群の一鶴のような気がする。<sup>(38)</sup>

また、一九二六年の上海旅行で郭沫若や田漢、歐陽予倩らと知り合い、中国文壇に関心をいだいていた谷崎潤一郎は中国の「現代作家の著作」の一つとして同書を取り上げ、次のように紹介した。

ところで縁縁堂随筆であるが、此の僅々百七十頁の小冊子を読んだゞけでも著者の愛すべき気稟や才能が窺はれて、いかにも吉川氏の言の読者を欺かないのを知るのである。(中略) 此の随筆はたしかに芸術家の書いたものだと云ふことが出来る。別に為めになることやむづかしいことなどを取り上げてゐるのではないが、ほんのちよつとした詰まらないことを書いても、此の人の筆にかゝると忽ち一種の風韻を帯びて来るところは不思議である。(中略) 就中私は、西瓜の種を食べることと云ふ巻頭的一篇十五頁程のものだけでも、多くの人々に是非読んでみることをすゝめたい。何となれば、こんなに支那的で、こんなに下らないことを、こんなに面白く書いてある点は、正に随筆の上乗と云へるからである。<sup>(39)</sup>

この谷崎の文章はその後、夏丐尊によって翻訳され、当時、夏丐尊が編集長を務めていた雑誌『中学生』に掲載された。豊子愷は後に同文に対する感想を発表したが、そこには随所に吉川、谷崎への痛烈な皮肉が込められている<sup>(40)</sup>。これについて、以下、随筆「喫瓜子（西瓜の種を食べること）」と『教師日記』から考えてみたい。原題にある「瓜子」とは、西瓜や南瓜など瓜類の種を炒ったもので、中国のごく一般的なお茶うけである。しかし、豊にとつて瓜子は見るも恐ろしい存在であった。

豊は平素から瓜子を嫌い、自宅に置くこともなかったが、疎開中に急性結膜炎を患い、両目が見えなくなった数日間は、瓜子を食べることが唯一の慰めとなった。その様子が『教師日記』に次のように記されている。

昔、縁縁堂（浙江省崇徳県にあった豊の自宅、大野注）にいた頃には、眼疾を患ってもオルガンや蓄音機があり、耳から精神の食糧を得ることができた。疎開中の今はすべてがなおざりで、ハーモニカすらない。（中略）ここ数日は瓜子を食べることが唯一の気晴らしとなった。（中略）かつて私はある文章で、瓜子は時間泥棒だと批判し、瓜子亡国論を述べた（宇宙風に掲載、原注）。ここ数日は、瓜子だけが私を慰めてくれるように思えた。思うに、病気の時は時間が有り余っていて、時をもてあますのが怖いのだ。しかし病が癒えた今では、瓜子を見ると忽ち嫌悪感が生じた。瓜子は退廃的な物にしか見えぬ、近寄ることもできない。広西の瓜子を批判する文章をまた書こうかと思つたが、ひとまずは数日の間、私を慰めてくれた瓜子の情誼を思い、止めておく<sup>(41)</sup>。

上文中の「瓜子亡国論」が即ち、谷崎の絶賛した随筆「西瓜の種を食べること」である。尚、文中に「宇宙風に掲載」とあるのは豊の記憶違いで、正しくは『論語半月刊』第四一期である。同文で豊はこう述べている。

瓜子の種を食べることを発明した人は実にずば抜けた天才である！これは最も有効な「暇つぶし」の方法で、

もし「歳月を無駄」にしたいならば、阿片を吸う以外には瓜子を食べるのが一番である。(中略)好きなだけ瓜子を楽しんでいる中国人は、暇つぶしという道にかけては、実には抜けて積極的な、行動力にあふれた人間である！(中略)中国人が「カリッ、ペッ」「ティッ、ティッ」という、瓜子を食べる音の中で無駄にする時間は、毎年統計を取ればきつと驚くべき数になるだろう。将来、この「瓜子を食べる道理や教え」が発展したならば、おそらく中国のすべてさえ、この「カリッ、ペッ」「ティッ、ティッ」という音の中で消滅してしまふことだろう。<sup>(42)</sup>

前述の谷崎の文章が発表されたのは一九四二年、中国語に翻訳されたのは一九四四年のことである。谷崎の「こんなに支那的で、こんなに下らないことを、こんなに面白く書いてある」という言葉を豊子愷は、そして戦時下の中国人読者たちは、如何なる思いで目にしたことだろう。

豊子愷のこの文章の根底には、中国国内に対する厳しい批判が存在する。豊は日記に瓜子について書いた一週間後にも、自らの髭を題材に国内批判を記した。豊子愷といえは、その長いあご鬚でよく知られているが、これは一九三〇年に亡くなった最愛の母、鐘雲芳への追慕の思いから蓄えられたものである。

豊子愷の父、豊鑽は挙人(一九〇二年合格)であったが、父母の喪中は受験不可との規定から会試を受験せぬまま、科挙制度が廃止となり、失意のうちに肺病で逝去した(享年四一歳)。父自身は科挙に翻弄されたような人生であったが、子どもの教育には比較的リベラルな考えをもっており、娘の教育にも力を注いだ。父の死後、母は近隣の農民相手の零細な藍染業とわずかな農地からの収入で、残された幼い豊子愷と七人もの姉妹を育てあげた。豊子愷は母の生存中に、その恩に報いきれなかったとの呵責の念から、髭を伸ばし始めたのである。

一九三九年二月二四日の日記には、豊子愷の髭をめぐる風評の数々が記されている。有名人であるが故に、疎開

途上の豊子愷一家の言動はしばしば興味半分、虚偽の報道をされた。まず初めは、上海の親戚からの手紙である。そこには「昨日、無錫新聞を見たところ、『子愷氏は入り組んだ山道やジャングルを延々と歩き、長沙に到達した。両手に余る程の長いあご髭はきれいに剃り落とされていた』と書いてありました。本当ですか？」と書かれており、それを読んだ豊子愷一家は大笑いした。豊は続けて、こう記している。

抗戦以来、江蘇や浙江の新聞がしばしば私の行方を掲載しているが、大部分はでたらめで、馬鹿げている。前に浙江のある新聞では、タイトルに「豊子愷、髭を切って抗戦する」とあった。またある新聞では、記者自身が開化で私に会ったが「長いあご髭は既に無かった」と述べている（実のところ、私はまだ開化には行ったことが無い、原注）。上海のある小新聞には「髭は一本も残っていない」と記されていた。今、無錫新聞にもまた「きれいに剃り落とされていた」と書かれている。この国家の危急存亡の時に、私の髭のことを国民がこのように気にかけてくれていたとは、実に予想外である。近頃、新枚が、私の胸に抱かれてはいつも小さな手で髭をもてあそび、時には数本抜いてしまう。今後はもう触らせないようにしなくてはいけない。これは新聞の題材であり、国民が囁目しているのだから、子どもが好き勝手にいじったり、抜いたりすべきものではないのだ。<sup>(43)</sup>

軽妙で皮肉の効いた文章は、まさにリベラリスト豊子愷の面目躍如である。当時の抗戦的文章の多くが日本批判に終始していたのとは大いに対照的である。

おわりに

以上、豊子愷が戦時下、疎開中に書いた『教師日記』の冒頭、桂林師範学校に奉職した一九三八年一月の日記

を中心に、当時、豊子愷がいただいていた時局への違和感、幼子の誕生に象徴されるような前途への希望、戦争にも影響されることのなかった信念、理想などを見てきた。

これ以降、豊子愷は恩師、馬一浮の待つ桂林浙江大学へ異動し、桂林師範大学とは異なった教師生活をおくることになる。桂林浙江大学への異動は馬一浮、豊子愷の願いであり、その実現は喜ばしい出来事であったが、戦時下の交通事情により、転居は物理的に困難をきわめた。このあたりの事情や馬一浮と豊子愷の師弟関係、桂林浙江大学での生活、そして新しい環境で豊子愷がいただいた想い等については、稿を改めて論じたい。

尚、小論は雑誌『東方』三五九号—三七三三号(二〇一一年一月—二〇一二年三月)に連載した「豊子愷『教師日記』を読む ある中国人漫画家の仏教ヒューマニズム」(第一回—第一五回)に修正、加筆したものである。『教師日記』に関する内容ではあっても、『東方』以外の論文等で既に発表したものについては省略した。<sup>(4)</sup>

(1) 小論では『教師日記』第三版(一九四六年、上海・萬光書局版)を用いる。

(2) 雑誌『宇宙風(乙刊)』(第一七期—第三〇期)に掲載された『教師日記』と単行本『教師日記』では、記載内容や表現に差異がみられる。単行本の刊行時、豊子愷一家は四川省に落ち着いていたが、『宇宙風(乙刊)』掲載当時は浙江省や広西省の各地を転々と疎開しており、『宇宙風(乙刊)』への日記の連載は国内各地の親戚、友人、読者に自分たち家族の無事や動向を伝える意味もあつたと考えられる。こうした内容の多くは単行本では省略されている。一方、政治的な意図や、思想的な内容で追加、削除された箇所も少なくない。尚、『宇宙風(乙刊)』第三〇期に掲載された『教師日記』(十続)の末尾には、(暫完)とあり、本来は単行本『教師日記』に収録された浙江大学当時(一九三九年三月—一九三九年六月)の日記も、続けて『宇宙風(乙刊)』に掲載の予定だつたのではないかと考えられる。

(3) 小野忍「豊子愷『教師日記』」『中国文学雑考』大安社、一九六七年、三〇五—三〇八頁。

- (4) 豊子愷「教師日記」『宇宙風（乙刊）』第一七期、七二六頁。以下、『宇宙風（乙刊）』に連載された「教師日記」については「日記」『宇宙風』と、また単行本『教師日記』については「日記」と省略する。
- (5) 同上（一九三八年一〇月二三日）。
- (6) 曾先之著、今西凱夫訳『十八史略上』学習研究社、一九八五年、五五七―五五八頁。原文は同著別冊、一三一―一三二頁。
- (7) 「日記」『宇宙風』第一七期、七二六頁（一九三八年一〇月二四日）。尚、この箇所は「日記」では削除されている。
- (8) 豊子愷は創設者の一人として、一九二八年以降も校務委員として立達学園に所属していたが、匡互生が病死すると、それ以前から見られた理想教育派と国民党右派との対立が更に顕著なものとなり、豊は周予同や沈仲九ら匡互生派とともに立達学園を完全に離れた。匡互生や沈仲九らは無政府主義者ではあるが、易寅村（培基）や李石曾、呉稚暉ら国民党元老らと密接な関係にあった。当時、国民党は拡大する共産党勢力と対抗する必要から無政府主義者の力を必要としており、無政府主義者もまた国民党の保護を利用していたためである。以上のような事情から、立達学園には国民党系と無政府主義系の双方の教師がおり、平素から対立関係にあった。
- (9) 「日記」『宇宙風』第一七期、七二六頁。
- (10) 豊子愷には新枚のほかに、長女陳宝（一九二〇生）、次女林先（一九二二年生）、三女靈馨（一九二二年生、豊子愷の姉豊満が離婚後に出産、豊子愷夫妻が実子同然に養育）、長男華騰（一九二四年生）、次男元草（一九二七年生）、四女一吟（一九二九年生）がいた。また、一九二六年には男児奇偉が生まれたが夭逝。
- (11) 「日記」、六頁（一九三八年一〇月二六日）。
- (12) 吉川幸次郎、『豊子愷「縁々堂隨筆」―訳者の言葉』、『吉川幸次郎全集』第一六巻、筑摩書房、一九七〇年、四四三―四四四頁。尚、全集収録にあたり、初本版（吉川幸次郎訳『縁々堂隨筆』創元社、一九四〇年）の旧字、旧仮名は新字、新仮名に改められているため、小論でもそのように表記した。
- (13) 「日記」五七頁（一九三八年二月二九日）。
- (14) 「日記」二四頁（一九三八年一月二七日）。豊子愷は引用に際して「山窮水尽疑無路」としているが、正しくは「山重水複疑

無路」。

(15) 「遊山西村」の書き下し文、翻訳にあたっては、以下を参照にした。前野直彬『山林のうた 宋・清(中国の名詩 八)』平凡社、一九八三年、五二―五三、二四四頁。小川環樹「陸遊」『小川環樹著作集 第三巻』筑摩書房、一九九七年、二二二―二三三頁。

(16) 小川環樹、同上「陸遊」、二三四頁。

(17) 同上。

(18) 豊子愷「致夏丐尊」『豊子愷文集』第七巻、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九二年、三六九頁。以下、『豊子愷文集』は『豊文集』と略す。出版年度は巻によって異なるため、その巻が初出の場合は年数を併記する。

(19) 『日記』二四―二五頁(一九三八年一月一七日)。

(20) 豊子愷「未来的国民―新枚」『豊文集』第五巻、一九九二年、六六七頁。

(21) 『日記』七八頁(一九三八年一月二八日)。尚、『宇宙風』第一七期の同日の「日記」(七二九頁)では、引用箇所冒頭は「牛乳を飲ませ、牛小屋に住まわせば、新枚は将来、牛のような大きな力で、敵を防御することができるだろう」となっている。

(22) 『日記』九頁(一九三八年一月二九日)。

(23) 『日記』『宇宙風』第一八期、七六七頁には、引用文中の「(特に中国において)」の記述は見られない。

(24) 『日記』一五一―一六頁(一九三八年一月三日)。

(25) 『日記』一五五頁(一九三九年六月二二日)。

(26) 豊子愷、前掲「未来的国民―新枚」六六四頁。

(27) 『日記』、前掲、一五五頁。

(28) 『日記』一三頁(一九三八年一月一日)。

(29) 魯迅「苦悶の象徴」引言および「出了象牙之塔」後記、『魯迅全集』(第一〇巻)、人民文学出版社、一九八二年、二三三―三三五頁。

- (30) 魯迅一九二四年二月初版、豊子愷一九二五年三月初版。
- (31) 魯迅「關於『苦悶的象徵』」、前掲『魯迅全集』（第七卷）、二四四頁。
- (32) 厨川白村「象牙の塔を出て」、『厨川白村集』第四卷、厨川白村集刊行会、一九二五年、一頁、七一八頁。
- (33) 『日記』一八頁（一九三八年一月七日）。尚、引用文中の「友人あるいは家の子ども」の箇所は、『日記』『宇宙風』第一期、八〇七頁では、「同じ学力レベルの友人」となっている。また、末文の「明らかに為し難きことであった」は、同『日記』では「はからずも絶対的に不可能なことであった。教師をすることへの興味が大いに失われた」となっている。
- (34) 『日記』三七頁（一九三八年一月二六日）。
- (35) 十三経注疎整理委員会『孟子注疏（十三経注疏）』北京大学出版社、二〇〇〇年、二六頁。尚、豊子愷の引用した「孳斯心加之彼」は、正しくは「孳斯心加諸彼」である。
- (36) 『日記』三六頁（一九三八年一月二六日）。
- (37) 同上、三七頁（同上）。
- (38) 吉川幸次郎、前掲「訳者の言葉」四四一頁。
- (39) 谷崎潤一郎「きのふけふ」『谷崎潤一郎全集 第十四卷』中央公論社、一九六七年、四六一頁、四七一―四七二頁。
- (40) 豊子愷「率真集」万葉書店、一九四六年。同書には上述の谷崎の文章の夏丏尊による訳文も収録。
- (41) 『日記』八四頁（一九三九年二月一七日）。
- (42) 豊子愷「喫瓜子」『論語半月刊』第四一期（一九三四年五月一六日）。
- (43) 『日記』八八頁（一九三九年二月二四日）。
- (44) 大野公賀『中華民國期の豊子愷』汲古書院、二〇一三年。ONO, Kimika, Feng Zikai's Experience of War as seen in *A Teacher's Diary* 『東洋法學』第五七卷第三号、四二三四―四二頁、二〇一四年三月。